

『文學界』（聚芳閣）細目稿補遺

前田 貞昭

本誌第12号に『『文學界』（聚芳閣）細目稿』を掲載したところ、阪本幸男氏から、未見としていた『文學界』が三重県の歌人・印田巨鳥の旧蔵書中にあり、現在、三重県立図書館に保存されている旨のお知らせを頂戴した。2001年4月調査に向向くことができたので、ここに新たに披見できた3号分について報告する。

『文學界』3号分とは、前稿『『文學界』（聚芳閣）細目稿』では、他誌に掲載された広告によって要目を掲出した大正13年10月創刊号第1巻第1号、掲載内容についてその情報を全く得ていなかった大正14年8月第2巻第8号、大正14年10月第2巻第10号である。

印田巨鳥の名前は『文學界』大正13年12月第1巻第3号に、「露原」（短歌）の寄稿者として見える。甘利多子「印田巨鳥——親愛なる尊父で慈父——」（三重県教育員会『芸術三重』第38号、1988年9月25日）に拠れば、巨鳥の本名は憲助、1894年12月14日生まれで、1979年3月4日歿。甘利は「橋田東声系の歌人。記紀、万葉、その他多くの古代文学を究む。考古学者。」と紹介している。また、『三重芸術』第27号（1983年3月15日）掲載の常磐井猷麿及び中瀬志郎の地元歌誌・結社紹介文に拠れば、『志支流』、『霸王樹』（三重支社）などに関わりが深い歌人である。なお、巨鳥の師筋の橋田東聲は十回近く『文學界』に寄稿し、著書『評釋萬葉集傑作選』（1925年6月）も聚芳閣から出している。

私の『文學界』への関心は、第一に井伏鱒二が発行元の聚芳閣に勤務していたこと、第二に『文學界』が井伏の初期作品の発表舞台になっていたことの二つにある。

第一の点では、創刊号の投稿原稿選者に勝承夫（筆名・宵島俊吉）の名前がないことから、創刊号編輯時点では、勝が聚芳閣に入社していなかったことが分かる。勝と同時に入社したと回想する井伏の聚芳閣入社も、これより後のことになる。以前、私は井伏の入社時期を大正13年9月20日頃と推定していたが（「井伏鱒二聚芳閣入社は、大正十三年十一月か——井伏聚芳閣勤務時代の検証——」、『言語表現研究』第17号、2001年3月15日）、この推定時期と新たな資料『文學界』創刊号との間に矛盾は生じないようだ。また、他の2号分からも井伏の聚芳閣勤務についての些かの情報を得られるが、これについては、『『文學界』（聚芳閣）新出資料と井伏鱒二聚芳閣勤務時代』（『言語表現研究』第18号、2002年3月予定）で報告したい。

第二の点に関しては、大正14年8月号第2巻第8号に井伏鱒二「乳母車」が掲載されていることを指摘しておきたい。この「乳母車」は、『不同調』昭和2年2月新人号第4巻第2号掲載「歪なる凶案」の初出形である（本号掲載、拙稿「井伏鱒二「乳母車」をめぐって——「歪なる凶案」との本文異同の検討、その他——」参照）。

なお、前稿では『読売新聞』掲載記事によって『文學界』創刊号を大正13年9月20日発売としていたが、現物には10月1日発行、9月28日印刷納本（奥付に記載。表1、4を欠いているためにそこに記されていたであろう法定文字は確認できていない）とある。これは、奥付等の記載日付と実売日との先後関係が、必ずしも出版法等の規定に従うものではない実例ということになる。志水松太郎は「又奥付の日付も、出版届とは何等関係のないもので、出版届に六月一日発行となつて居つても、奥付の発行日付は五月二十日でも、六月十五日でも差支へないものである。其處は出版物届の要件が具備して居る事と、實際書物が書店へ廻る日が、規定通りになればよいわけである。」と述べている（『改訂増補 出版事業とその仕事の仕方』峯文荘、1937年6月1日。229頁）。創刊号「編輯餘録」に附した注7でも触れたように『文學界』が9月1日創刊予定であったことにも注目しておきたい。

また、『文學界』第2巻第10号の特集「同人雑誌の意義と使命」には、尾崎一雄、横光利一原稿があり、詩人・北園克衛も橋本健吉の本名で寄稿している。その他、この特集には、島崎藤村・武者小路實篤の談話筆記が掲載されていることも付け加えておく。

凡例

1. 原則として本文に附された標題・執筆者を掲出し、本文あるいは目次標題に（ ）で括ってジャンルなどが表示されている場合は、本細目稿補遺でも一々断わらずに（ ）に括って示した。なお、選評などで目次標題の方が分かりやすいと判断したものは目次から採り、その旨を注記した。
2. 本文・目次に記されている欄名などは【 】で示し、無署名記事は特に混乱を起こさないとと思われる場合は筆者名を空白のままとした。
3. 編者の注記は〔 〕に入れた。
4. 「文叢」欄掲載投稿原稿については、主として目次に掲出されているものを掲げたが、繁簡錯雑として必ずしも整序に至っていないことを断わっておく。

第1巻第1號10月創刊號

1924（大正13）年10月1日發行（9月28日印刷）

定價25錢

編輯兼發行者：松本清太郎

印刷者：田中常太郎（三誠社）

表紙：大澤美舟（入選畫）

【口繪寫眞】

新進作家の倂〔新井紀一氏、加宮貴一氏、下村千秋氏〕

文學界編輯部員

怒り上戸（小説）	加宮貴一	2-7
おくまの妊娠（推選小説）	吉田幸四郎	8-13
新進作家論（その一）	林政雄	14-15
沼（小品）	成瀬無極	16-20
風の中の雞、他三篇（長詩）	近藤榮一	21-21
旅の印象	文壇三十七家	22-32
加宮貴一 佐藤惣之助 米澤順子 佐々木味津三 福田正夫 中西伊之助 戸川貞雄 新居格 小島徳彌 生田春月 近松秋江 橋田東聲 加藤武雄 前田夕暮 若月紫蘭 白鳥省吾 若山牧水 岡榮一郎 南部修太郎 半田良平 小川未明 新井紀一 柴田勝衛 日夏耿之介 堀田克三 土岐善麿 近藤榮一 足立欽一 高梨直郎 山田邦子 倉田潮 荻原井泉水 細田民樹 澤ゆき 石原純 正富汪洋 深尾須磨子		
『赤・黒・白』の翻譯について	神山宗勳	33
私と田山先生	小島徳彌	34-35
自家廣告	新井紀一	36-37
ゴシツブ	X、Y、Z	37
屈辱の裏		
赤、黒、白		
文藝講座		
T君の話	下村千秋	38-39
ありわびて（短歌）	高梨直郎	39
起て、若人等よ——「藝術革命」について——	川添利基	40-41
燈籠流し（小品）	倉田潮	42
短篇小説 ソラの死後（佳作）	一木十吉	43-48
小説選後に	足立欽一	48-50
【文叢】		
感想	〔青木須磨子等6人〕	51-53
長詩	〔永澤成美等11人〕	54-57
短歌		58-60

俳句	61-63
每號懸賞募集規定 ^{註6}	63
編輯餘録 ^{註5}	64

注1、目次に「文學界編輯部員」とある口絵の2頁目は、三重県立図書館蔵のものでは、口絵の1頁目が上下逆転した形で印刷されていて、目次にいう「文學界編輯部員」の内容を確認できなかった。

注2、本文末尾に「(十三年八月)」とある。

注3、目次には「佐々木味津三」の名前はない。また、目次には「中村星湖」の名前が掲げられているが、本文には星湖の回答は掲載されていない。

注4、本文末尾に「近著歌集「傷める花」より」とある。

注5、更科絃像(釧路)「曙光」を含む。

注6、末尾に責任者として「編輯部員／責任者／高梨直郎／松本清太郎／足立欽一」と3名の名前が掲げられている。なお、次号第1巻第2号には、高梨直郎の次に宵島俊吉の名前が加えられている。

注7、冒頭に「口初號を九月一日に創刊する豫定であつたが投書作品をなるべく多く載せたかつたのでその選のために約半月遅れた。寄稿をして下さつた諸氏及び多くの愛讀者諸子へ深くお詫びを申し上げる。」とある。また、「口創刊號には、載せきれなくて澤山の良い作品を次號に譲つた。鷹野つぎ子氏の寄稿その他數篇が止むなく本誌を飾れなかつたことは甚だ遺憾千萬である。」とある。

第2卷第8號8月號

1925(大正14)年8月1日發行(7月25日印刷納本)

定價30錢

編輯兼發行者：松本清太郎

印刷者：野口常太郎(友文社)

表紙畫：記載なし

【口繪寫眞】

福田正夫・白鳥省吾兩氏の出版紀念會 川添利基氏「凝視」出版紀念會

藤森成吉氏歸京歡迎會の集り 岡本かの子史の歌集「浴身」出版紀念會の集り

現下文壇に及ぶ 土田杏村 2-3

【創作五篇】

乳母車(小説) 井伏鱒二 4-9

夏日小品(小品) 木村 恆 10-13

だまし合ひ(諷刺劇) 島 盟影 14-16

女にきずつけられた顔(推薦小説) 中村かずみ^{註1} 17-20

帽子(推薦戯曲) 川村一三 21-25

戯曲の選後に 川添利基 25

尼僧院(短歌) 柳原燐子 26

田園閑居 岡田伊三郎 27-28

文學界讀者の會開催 28

夏と女性との印象〔アンケート回答〕 諸家 29-32

石樽千亦 中西伊之助 武野藤介 白鳥省吾 川路柳虹 林和 増田片滿雄 生

方敏郎 白井喬二 伊藤貴麿 伊藤永之介 白田亞浪 金子光晴 古賀龍視 今

野賢之 近藤榮一 Toki-Zenmaro 安倍能成 大月隆仗^{註3}

空景——大連發自働拳銃と

香水瓶にデジケートする詩——(詩) 橋本健吉 33

海の詩六章(詩) 高橋新吉 34-35

はつ夏の精神(詩) 夢羅木竹夫^{註4} 35-36

短篇小説に於ける立體的表現と幾何學的機構 深谷 進 36

通俗小説提唱に就て(森本巖夫氏に與ふ) 鴨飛田比古一 36-37

ゴシップ ^{注5}	章魚の足	37
夏來る（短歌）	山西敏郎	38
山房から	欽一 ^{注6} 生	39-40
『文學界』一周年紀念特別倍大號原稿募集	〔無署名〕	41
川添利基君の『凝視』 ^{注7}	中村星湖	42-43
マリアン、ムーア ^{注8} のこと	仲郷	43
自分で書いた『凝視』の會の記	川添利基	44
私が海外に旅行するなら	〔武田靜人等5名〕	45
探してゐるもの	〔北原伸一郎等6名〕	45
いよいよ多く集つてくる小説	松本清太郎	46
【文叢】		
短篇小説・戯曲・他・懸賞募集規定		47
【小壇論】（編輯局選）		48-49
農民作家の出現を望む〔他2篇〕	〔伊藤壁人等3名〕	
【小品文】（岡田伊三郎選）		50-55
エピソード〔他11篇〕	〔鴨飛比古一等12名〕	
小品選後	岡田伊三郎	55
【長詩】（福田正夫選）		56-58
詩選漫言	福田正夫	58
【短歌】（高梨直郎選）		59-61
選後小感	高梨直郎	61
【俳句】 ^{注9} （岡田伊三郎選）		62-63
〔試作五句〕	直郎生	63
誌友通信		64-65
編輯室から		66

備考：目次掲出のノンブルと本文のノンブルとの間には一致しないところがある。なお、巻末の68頁に当たるところ（ノンブルなし）に新宿園で8月2日開催予定の文学界読者大会の案内があり、「讀者大會出席諸家【豫定】」として、徳田秋聲、中西伊之助、十一谷義三郎、橋田東聲、高梨直郎、福田正夫、白鳥省吾、中村星湖、林政雄、新井紀一、下村千秋、倉田潮、足立欽一、邦枝完二、永田龍雄、川添利基、松本清太郎、岡田伊三郎の名前が掲げられている。

注1、目次には「女に疵つけられた顔」とある。

注2、目次には「中村かずを」とある。

注3、目次には「大月隆仗」とある。本文及び他の号では「大月隆仗」とあるのに従った。

注4、目次には「蔓羅木竹夫」とある。本文及び他の号では「夢羅木竹夫」とあるのに従った。

注5、目次には掲出されていない。

注6、目次には「足立欽一」とある。

注7、本文末尾に「（七月八日）」とある。

注8、目次には掲出されていない。本文末尾に「（仲郷）」とある。

注9、俳句欄に選評は附されていない。

第2巻第10號10月號一週年特別號

1925（大正14）年10月1日發行（9月25日印刷納本）^{注1}

定價50銭

編輯兼發行者：松本清太郎^{注2}

印刷者：野口常太郎（友文社）

表紙：スペインのセバスチアンの景 水木伸一

人生記録としての小説（評論）	武藤直治	2- 4
飯倉談片（感想） ^{注3}	島崎藤村 ^{注4}	5- 7

月評の振作 (評論)	林 政雄	8-12
海外藝術評論叢書の内容その他	土田杏村	12
勞農ロシアの劇藝術 (藝術講座・講話)	新居 格	13-16
笹塚の邊にて=詩生活回想=(感想)	福田正夫	17-20
藝術の永遠性『この罪を見よ』について	中西伊之助	21-22
ゴシツブ	[無署名]	22
中山劇場談奇 (隨筆)	佐藤惣之助	23-26
秋の感覺 (プーシュキン)	杉本 喬譯	27
海邊にて (ラビントウナアド、タゴール)	吉川則比古譯	28
同人雑誌の意義と使命	[29]	
同人雑誌の持つ意義と使命	多田文三	30-31
文黨の場合	今 東光	31-32
雑誌「マヴォ」のこと	村山知義	32-33
今後の同人雑誌は	森山秋朗	33-34
同人雑誌時代及び「不同調」のこと	中村武羅夫	34-36
雑誌のこと	野川 隆	36-37
同人雑誌から本當のものが生れる	生田蝶介	37-38
同人雑誌の持つ意義と使命	杉本捷雄	38-39
「白樺」其の他	武者小路實篤	39-40
同人雑誌の意義と使命	尾崎一雄	41-42
祝福さるべき同人雑誌	中河與一	42
理想の實現まで	森本巖夫	43-44
雜感二三	崎山正毅	44-45
雑誌「生命」に就いて	白井四郎	45-46
廣き隣地の開拓者	高須清二	46-47
「文藝戦線」に就て	山田清三郎	48-49
人生の爲の同人雑誌	高群逸枝	49-51
文藝の道への精進	高木秀夫	51
よき作品を生むきつかけ	「鼎座」同人	51-52
同人雑誌の意義	横光利一	52
私だけの考へ	楠田敏郎	52-53
同人雑誌の過去及現在	宮小路正彦	54-55
蒼穹に吠ゆ (推薦詩)	塚原喜重	56-57
およぐ鼠 (推薦詩)	夢羅木竹夫	57-58
ある女に (推薦詩)	平澤杉夫	59-59
旅人の生活 (推薦詩)	島田馨也	59
現代詩講話一 (講話)	川路柳虹	60-63
寄贈雑誌		63
圓覺寺境内樂々庵 (歌)	永田龍雄	64
「我が日記の斷片」より (小品)	ゴーリキイ 本郷一郎譯	65-66
〔短歌 (選外佳作)〕		66
十一人集 (推薦歌)	[早乙女歌津等]	67-73
社會と文藝との交渉 [アンケート回答]	諸家	74-80
戸川貞雄 新井紀一 小島健三 柴田勝衛 中西伊之助 國枝史郎 關口次郎		
津田光造 大槻憲二 淺原六郎 勝承夫 江馬修 佐々木孝丸 津村京村 辻潤		
今東光 木蘇毅 鈴木善太郎 千葉龜雄 川路柳虹 邦枝完二 杉村廣太郎 生		
方敏郎 角田竹夫 吉屋信子 近藤榮一 石坂養平 青野季吉 武野藤介 白井		
喬二 白鳥省吾 生田葵 中村吉藏 下村千秋		

アメリカ詩抄——戦争と國民——	渡邊正知譯	81
一周年の感想	[鳴海四郎等8名]	82-83
【萬華鏡 ^{注18} 】		
批評の輸入と獨立	林 政雄	84
評傳文學の必要	尾關岩二	84-85
渡船の中で	今田謹吾	85-86
芥川龍之介氏は小さい ^{注20}	松本清太郎	86-88
戯曲	狩野鐘太郎	88
文學界投書家番附（自大正十三年九月至大正十四年九月） ^{注21}		89
投書時代の思ひ出（感想）	白鳥省吾	90-93
俳優のうたへる（歌） ^{注22}	清水一郎	93
【創作】		
夏一夜（推薦小説）	堀田由之助	94-98
生きむとする者の聲（推薦戯曲） ^{注23}	鳴海四郎	99-108
悲しき踊り手（小説）	中西伊之助	109-114
無頼（小説）	渡邊 清	115-117
或夜の記憶（小説） ^{注24}	中村星湖	118-120
選後感	徳田秋聲	121
特に集まつた夥しい佳作（應募小説豫選評） ^{注25}	松本清太郎	122-124
青き灯のもとにて（戯曲選評）	邦枝完二	124
詩選雜感	福田正夫	125-126
短歌選後感	高梨直郎	126
詩佳作		127-131
短歌佳作		132-133
誌友通信		134-135
文壇クロスワード・パズル ^{注26}		136-137

備考

注1、表1、表4の表示に抛る。奥付には、「大正十四年八月廿五日印刷／大正十四年九月一日発行」とあるが、これは前号第2巻第9号大正14年9月号〔現物未確認〕の印刷日、発行日が誤って印刷されたものと思われる。

注2、ここでは奥付に記載された編輯発行人等を掲出したが、注1に記した事情があるので、若干の疑問は残る。

注3、本文には「飯倉談片（感想）」、目次には「飯倉談片（感志）」とある。

注4、本文末尾には「（談話）／文責、松本清太郎」とある。

注5、目次には掲出されていない。

注6、本文末尾に「（八月十四日）」とある。

注7、目次には掲出されていない。

注8、目次には掲出されていない。

注9、中扉。目次には「同人雑誌の持つ意義と使命」とある。この中扉には、所属同人雑誌と寄稿者名とを以下のように掲げている。「ド、ド、ド 多田文三／文黨 今東光／マヴォ 村山知義／全無名作家同盟 森山秋朗／不同調 中村武羅夫／G. G. PG 野川 隆／獵人 生田蝶介／白山文學 杉本捷雄／不二 武者小路實篤／主潮 尾崎一雄／文藝時代 中河與一／不同調 森本巖夫／辻馬車 崎山正毅／生命 白井四郎／藝術部 高須清二／文藝戰線 山田清三郎／萬人文藝 高群逸枝／新思潮 高木秀夫／鼎座 「鼎座」同人／文藝時代 横光利一／獵人 楠田敏郎」。なお、この特集本文の最後に掲載されている宮小路正彦に関しては、中扉への記載を欠く。また、6つ目の同人誌「G. G. PG」は、「G. G. P. G」とあるべきところ。

注10、本文末尾に「（談）」とある。

注11、目次には掲出されていない。

注12、目次には掲出されていない。

- 注13、目次には掲出されていない。
注14、目次には掲出されていない。
注15、目次には掲出されていない。
注16、本文冒頭に「八月五日、もの寂びたる樂々庵茶室に戯曲執筆中の足立欽一を訪ふ」と詞書きがある。
注17、目次には掲出されていない。
注18、本文末尾に「(八月十六日)」とある。
注19、目次には【萬萃鏡】とある。
注20、本文末尾に「九月七日(未完)」とある。
注21、目次には掲出されていない。
注22、目次には掲出されていない。
注23、本文末尾に「二五・八・一二」とある。
注24、本文末尾に「一九二五・九・一一」とある。
注25、本文末尾に「九月一日」とある。
注26、目次には掲出されていない。

附記

『文學界』の所在をお知らせいただいた阪本幸男氏、閲覧に際して特に御配慮を賜った三重県立図書館青山泰樹氏に深謝申し上げます。